

(案)

障 障 発 ※ 第 ※ 号
平 成 ※ 年 ※ 月 ※ 日

各 都道府県 障害保健福祉主管部（局）長 殿

厚生労働省社会・援護局
障害保健福祉部障害福祉課長

やむを得ない事由による措置（障害児通所支援）を行った場合の単価等の取扱いについて

児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号。以下「法」という。）第 21 条の 6 の規定に基づき、平成 24 年 4 月 1 日以降、やむを得ない事由による措置（障害児通所支援の措置を行った場合に限る。以下「やむを得ない事由による措置」という。）を行った場合の単価等の取扱いについては、交付要綱等に定めることとしているが、その内容は下記のとおりであり、平成 24 年 4 月 1 日より適用することとしたので、御了知の上、管内市町村等に対して周知をお願いしたい。

記

- 1 平成 24 年 4 月 1 日以降、やむを得ない事由による措置を行った場合の費用の算定に当たっては、「児童福祉法に基づく指定通所支援及び基準該当通所支援に要する費用の額の算定に関する基準（平成 24 年厚生労働省告示第 122 号）」に準じて算定した額（以下「障害児通所支援給付費基準額」という。）及び法第 21 条の 5 の 28 第 2 項に規定する肢体不自由児通所医療につき健康保険の療養に要する費用の額の算定方法により算定した額（以下「肢体不自由児通所医療費基準額」という。）を合算した額とするものであること。
- 2 措置を行った場合は、速やかに障害児通所給付費等の通所給付決定を行うことができるように努めること。
- 3 法第 21 条の 6 の措置（障害児通所支援に係るものに限る。）に要する費用の全部又は一部を徴収する金額（以下「通所利用者負担額」という。以下同じ。）については、別紙（やむを得ない事由による措置を行った場合の通所利用者負担額の算定に関する基準）を適用することとし、市町村が扶養義務者（民法に定める扶養義務者をいう。以下同じ。）から徴収するものとする。

- 4 主たる扶養義務者が、他の社会福祉施設の被措置者の扶養義務者として費用徴収される場合には、本制度による通所利用者負担額は次により算定した額とすること。

通所利用者負担額 = 本制度により算定した額 - 他の制度による費用徴収額

- 5 公費の支弁については、障害児施設措置費（給付費等）国庫負担金から支弁すること。

- 6 「里親に委託されている児童が保育所へ入所する場合等の取扱いについて」（平成11年8月30日付児家第50号）に基づき、里親及び小規模住居型児童養育事業を行う者に委託されている児童が障害児通所支援を受ける場合についても本通知の適用となるものであること。

ただし、この場合において2は該当しないものとし、費用徴収は免除の扱いとすること。

(別紙)

やむを得ない事由による措置を行った場合の通所利用者負担額の算定に関する基準

| 税額等による階層区分 | | 上限月額 | 障害児通所支援事業所 | |
|------------|-----------------------------------|------------------------------|----------------|-------|
| 階層区分 | | | 徴収金基準額 (日額) | |
| A | 被保護者等 | 0円 | 0円 | |
| B | 当該年度分の市町村民税は非課税の者(A階層に該当する者を除く。) | 0 | 0 | |
| C1 | 前年分の所得税が非課税の者(A階層又はB階層に該当する者を除く。) | 当該年度分の市町村民税のうち均等割のみ課税の者 | 1,100 | 100 |
| C2 | | 当該年度分の市町村民税のうち所得税が課税の者 | 1,600 | 200 |
| D1 | 前年分の所得税が課税の者(A階層又はB階層に該当する者を除く。) | 15,000円以下 | 2,200 | 300 |
| D2 | | 15,001円から 40,000円まで | 3,300 | 400 |
| D3 | | 40,001円から 70,000円まで | 4,600 | 500 |
| D4 | | 70,001円から 183,000円まで | 7,200 | 700 |
| D5 | | 183,001円から 403,000円まで | 10,300 | 1,000 |
| D6 | | 403,001円から 703,000円まで | 13,500 | 1,300 |
| D7 | | 703,001円から 1,078,000円まで | 17,100 | 1,700 |
| D8 | | 1,078,001円から 1,632,000円まで | 21,200 | 2,100 |

| | | | |
|-----|--|---------------------------------------|---------------------------------------|
| D9 | 1,632,001円から 2,303,000円まで | 25,700 | 2,500 |
| D10 | 2,303,001円から 3,117,000円まで | 30,600 | 3,000 |
| D11 | 3,117,001円から 4,173,000円まで | 35,900 | 3,500 |
| D12 | 4,173,001円から 5,334,000円まで | 41,600 | 4,000 |
| D13 | 5,334,001円から 6,674,000円まで | 47,800 | 4,600 |
| D14 | 6,674,001円以上 | 障害児通所支援給付費 基準額及び肢体不自由 児通所医療費基準額 | 障害児通所支援給付費 基準額及び肢体不自由 児通所医療費基準額 |
| 備考 | <p>1 障害児の扶養義務者(障害児と同一の世帯に属し、かつ、生計を同じくすると認められる配偶者、父母又は子のうち、市町村民税又は所得税の税額が最も高いものに限る。以下同じ。)が負担すべき額は、税額等による階層区分に応じ、負担基準額の欄に掲げる額とする。</p> <p>2 1の規定にかかわらず、障害児の扶養義務者の1月当たりの負担額は、税額等による階層区分に応じ、上限月額額の欄に掲げる額を上限とする。</p> <p>3 この表において「市町村民税」とは、地方税法(昭和25年法律第226号)の規定による市町村民税(同法の規定による特別区民税を含む。)をいい、「均等割」及び「所得割」とは、それぞれ、同法第292条第1項第1号及び第2号に規定する均等割及び所得割(それぞれ、同法の規定による特別区民税に係るものを含む。)をいう。ただし、均等割又は所得割の額の計算においては、同法第323条の規定により市町村民税の減免が行われた場合には、その額を所得割の額又は均等割の額から順次控除した額を所得割の額又は均等割の額とし、所得割の額の計算においては、同法第314条の7、第314条の8、同法附則第5条第3項及びに第5条の4第6項の規定は適用しないものとする。</p> <p>4 この表において「所得税」とは、所得税法(昭和40年法律第33号)、租税特別措置法(昭和32年法律第26号)及び災害被害者に対する租税の減免、徴収猶予等に関する法律(昭和22年法律第175号)の規定によって計算される所得税をいう。ただし、所得税額の計算においては、次の規定は適用しないものとする。</p> <p>(1) 所得税法第78条第1項並びに第2項第1号、第2号(地方税法第314条の7第1項第2号に規定する寄附金に限る。)及び第3号(地方税法第314条の7第1項第2号に規定する寄附金に限る。)、第92条第1項並びに第95条第1項、第2項及び第3項</p> <p>(2) 租税特別措置法第41条第1項、第2項及び第3項、第41条の2、第41条の3の2第4項、第41条の19の2第1項並びに第41条の19の5第1項</p> <p>(3) 租税特別措置法等の一部を改正する法律(平成10年法律第23号)附則第12条</p> | | |